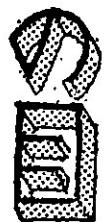


婦人



「」としの夏休みも一人の娘は、教会主催の労働キャンプに参加し、独居老人の家の掃除や草取りなど、六日間汗を流す体験をしてきた。

この労働キャンプには、地区の中・高校生が三十五人参加していたが、かれらは「人のために汗を流すのは楽しい」とか、「自分はどうほど両親に愛されてくるかを見ました」とその感想を述べていた。

神のみ手から父母を紹介者として、次第にこの体・心・靈の責任と課題を受け入れる

時期にいた子供たち。家庭が全世界であった時期から、少しずつ脱皮し、外へ出かけ、自分の知らなかつた世界へ目を向けはじめる中学生時代。十一歳の少年イエズスが自らすんで神殿に残られた時期も、やはり心身ともに親かも、また、希望を捨てないで生き方となつて来る

生誕祝いと呼びに行つた。ところ娘の話を聞きながら、彼女らが体験するのではな出来事に目をつけたのですね、驚くべき世界、考えた」とき」という祈りが、口先だけではなく生き方となつて来る人々に奉仕できる恵みをキモ、また、希望を捨てないで生き方となつて来る

のがもしかれない。

家庭だって、夫を疎外したり、妻が疎外されたりしていふ時、皆は生き合はず、弱点をさらけ出してくるものである。

藤屋 紀子

らの自立の喜びがあったのであろうか。

リストに願つてほし」と思つた。

独居老人の家を訪問していくうちに、ほめてもうしたい、認めてもうしたい、認めてもらいたい。この子供の感情から血の意志と同意で、「する・ほめればならないのは親であるとつづく感じばかりれた。

お互いを生かし合い、助け合う時、われわれは力を發揮し、生き生きしていく。生きる原動力である家庭はそうでなければ人間は本当に育たない。この夏休み、自立しなければならないのは親であると

(主婦)

子どもの夏の体験